様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３１１５

研究課題名（和文）日本の公立小学校の英語授業における学級担任、ALT、児童のインタラクション分析

研究課題名（英文）An analysis of interactions among homeroom teachers (HRTs), assistant language teachers (ALTs), and pupils in English classes in a Japanese elementary school

研究代表者
志野　文乃（Shino, Ayano）

東京学芸大学・教育学部・特任講師(Ｉ種)

研究者番号：００８２２１９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、「日本の公立小学校の教室内で、学級担任、外国人指導助手（ALT）そして児童がどのように関わり合いながら英語を学び、教えているか」ということについて、実際の教室内での三者のインタラクションを分析し明らかにし、これを小学校英語教育の更なる充実に貢献させることである。
　調査の結果、三者は、共通語としての英語（English as a lingua franca: ELF）を使用する状況下で、あらゆる言語的・非言語的資源を使い、英語学習に取り組んでいることが分かった。また、様々な国からALTを採用することで、英語学習者・使用者として多様なモデルを児童に示していることも分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　国際化に伴い、日本の公立小学校では、2020年度から高学年における英語の正式教科化、中学年における英語活動の必修化が始まった。こうした背景を踏まえ、小学校における英語教育の機会が今後更に増えることから、日本の小学校英語教育における教室内のインタラクションを録音分析し、学級担任とALTのより効果的なチームティーチングの方法および教師と児童のより効果的な英語授業中の関わり方について探究することは非常に重要な課題である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study is to investigate how homeroom teachers (HRTs), assistant language teachers (ALTs), and pupils interact with each other to learn and teach English in English classes in a Japanese elementary school. The results of the study show that the three parties learn or teach English by utilizing various ways, such as the use of discourse markers, the interlocutors' L1, repetition, repair, and silence, using linguistic and non-linguistic resources available in order to achieve mutual understanding. Moreover, it is revealed that the ALTs in the study are hired not only from English-speaking countries but also from various countries, and they become model learners or users of English for the pupils.

研究分野：外国語教育（特に小学校英語教育）、教室談話分析

キーワード：小学校英語教育　教室談話分析　会話分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

国際化に伴い英語が「基本的なスキル」と見なされ（Graddol, 2006, p. 72）、昨今近隣のアジア諸国が英語教育を推進している（Butler, 2015; Yano, 2009）。日本の公立小学校でも、2011 年度から小学校高学年を対象に週一回英語活動が必修化され、2020 年度から高学年における英語の正式教科化、中学年における英語活動の必修化が実施された。日本教材文化研究財団（2010）によると、全国の人口 3 万人以上の市区町村の教育委員会のうち、97.0％（293/302）が ALT を小学校へ派遣しており、英語活動では学級担任と ALT がチームティーチングをする形態が多いことが分かる。そのため、本研究ではチームティーチングのコンテクストでの学級担任と ALT、および児童のインタラクションに着目する。前述の通り、研究開始当初、日本では小学校における英語教育体制の確立途中であったため、日本の公立小学校でのチームティーチングの状況において、英語授業中のインタラクションを録音・収集して分析した研究はまだ少ない（ただし例外として Aline & Hosoda, 2006; Hosoda & Aline, 2013; Hosoda, 2015 参照）。

２．研究の目的

本研究の目的は、「日本の公立小学校の教室内で、学級担任、ALT、そして児童がどのように関わり合いながら英語を学び、教えているか」ということについて、実際の教室内での三者のインタラクションを会話分析的・教室談話分析的に分析し明らかにし、これを小学校英語教育の更なる充実に貢献させることである。国際化に伴い、日本の公立小学校では、2011 年度から小学校高学年を対象に週一回の英語活動が必修化され、2020 年度から高学年における英語の正式教科化、中学年における英語活動の必修化が始まった。こうした背景を踏まえ、小学校における英語教育の機会が今後更に増えることから、日本の小学校英語教育における教室内のインタラクションを録音分析し、学級担任と ALT のより効果的なチームティーチングの方法および教師と児童のより効果的な英語授業中の関わり方について探究することは非常に重要な課題である。

３．研究の方法

本研究の事前調査として、研究者は補助教員として 2013 年度まで地域の小学校で授業中の支援をしながら実地調査を行った。更に、2020 年度からの英語正式教科化への移行期間であった 2019 年に、再び研究対象校を訪問し追加調査を行った。その後、新型コロナウィルスの影響で対象校への訪問に制限があり、2022 年度は教育委員会へのインタビュー調査を行った。2023 年度は、対象校を訪問し、授業観察および授業中のインタラクションの録音・分析を行った。

教室内の授業中の発話はボイスレコーダーで録音し、書き起こしたデータは主に会話分析（e.g. Sacks, et al., 1974）および教室談話分析（e.g., Rymes, 2009; Sinclair & Coulthard, 1975; Walsh, 2013）の手法を用いて分析した。インタビューについては、研究者が予め質問を用意しつつ、被面接者の回答に応じて質問内容を追加したり順序を変更したりしながら進める半構造化面接（Mackey & Gass, 2005）を行い、面接内容をボイスレコーダーで録音し書き起こしたデータを分析した。

４．研究成果

（１）授業中の観察およびインタラクション分析

調査の結果、学級担任、ALT、そして児童の三者は、共通語としての英語（English as a lingua franca: ELF）を使用する状況下で、あらゆる言語的・非言語的資源を使い、互いの関係を良好に保ちつつ、英語学習に取り組んでいることが分かった。具体的には、談話標識（discourse markers）、相手の第一言語、繰り返し（repetition）の使用、および修復（repair）や沈黙（silence）による相手のイレギュラーな発話への対応等が挙げられる。修復や沈黙の現象に関しては、話し手が聞き手の第一言語を使用して相手の理解を促進したり相手の第一言語に適応しようと試みる中で言い間違えがあった場合に、話し手との良好な関係を保つため、聞き手は直接言い間違えを正すことなく相手の言葉をより適切な形に言い換えたり、時には沈黙を保ったりする場面も見られた。一方で、文化的背景知識の違いや各々が持つ固定観念が要因となり、三者間で誤解が生じる場面も見られた。

（２）教育委員会へのインタビュー調査

教育委員会へのインタビュー調査では、所謂英語圏出身の ALT だけでなく、様々な国から ALT を採用することで、英語学習者・使用者として様々なモデルを児童に示していることが分かった。研究対象校がある市（以下、A 市）の教育委員会では、当初、所謂英語圏（内円: inner circle, Kachru, 1985）出身の ALT を採用することが望ましいと考えていたが、様々な国から ALT 志願者が現れ、採用時のインタビューや実際の授業での様子を通して、ALT が必ずしも英語圏出身である必要はなく、英語を第一言語としない ALT もまた、児童の学習者モデルとして良い影響を与えることが分かり、大切なことはどこの国の出身かということではなく、児童への接し方、英語教育に対する熱意、自身の文化を伝える表現力等であり、一人一人の人間性を重視したいと

いう考えに変わったことが分かった。こうして ALT の多様性を重んじる A 市では、様々な国出身の ALT が活躍しており、授業中だけでなく休み時間等、授業外の時間も子どもたちが積極的に ALT と交流する様子が見られ、児童に良い影響を与えていることが分かった。このように ALT の多様性を受け入れる環境は、出身国を問わず様々な人と共通語としての英語を介しコミュニケーションを図ろうとする ELF（English as a lingua franca）の状況を体現していると言えるだろう。小学校の英語教育では、言語教育だけでなく、コミュニケーション教育も重視しているため、今後も A 市の ALT の多様性に関する動きに注目して行きたいと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Shino Ayano	４．巻 17-3
２．論文標題 Repair or not? Face-saving in EFL Classes in an Elementary School in Japan	５．発行年 2024年
３．雑誌名 English Language Teaching	６．最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5539/elt.v17n3p43	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 志野　文乃	４．巻 46-3
２．論文標題 Use of Repetition in the ELF Context of Japanese Primary School English Lessons	５．発行年 2022年
３．雑誌名 The Language Teacher	６．最初と最後の頁 3-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTTLT46.3-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 志野　文乃	４．巻 15
２．論文標題 ALTによる効果的な談話標識の使用	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語文化教育	６．最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ayano Shino	４．巻 27-2
２．論文標題 Effective use of scaffolding in English lessons in a Japanese primary school: A classroom DA approach.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 ： 別冊	６．最初と最後の頁 239-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 志野　文乃
２．発表標題 日本の小学校英語教育における文化的感受性および意識に関する一考察
３．学会等名 大学英語教育学会（JACET）第62回国際大会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 志野　文乃
２．発表標題 Cultural Sensitivity and Awareness in Primary EFL Lessons
３．学会等名 49th Annual International Conference on Language Teaching and Learning (JALT 2023)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 志野　文乃
２．発表標題 Other-Initiated Self/Other-Repair Between HRTs, ALTs, and Pupils in English Lessons in a Japanese Primary School
３．学会等名 The JACET 61st Commemorative International Convention（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 志野　文乃
２．発表標題 Face Saving in English Classes in a Japanese Primary School
３．学会等名 The 20th AsiaTEFL International Conference 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 志野　文乃
２．発表標題 小学校の英語授業における効果的な談話標識の使用
３．学会等名 日本児童英語教育学会第41回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 志野　文乃
２．発表標題 The Use of Repetition in English Lessons in a Japanese Primary School
３．学会等名 The JACET 60th Commemorative International Convention（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 志野　文乃
２．発表標題 日本の小学校英語教育でのチーム・ティーチングにおける適応（accommodation）の一考察～共通語としての英語（ELF: English as a Lingua Franca）の視点から～
３．学会等名 日本児童英語教育学会第40回全国大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関